【玄海原発の問題点――これでも再稼働するというのか！】

（１）活断層の連動問題

九電は糸島半島沖断層群と前原断層を約２１キロの１本の断層とみなし、耐震安全評価でＭ7.0としているが、九州大学の下山助教グループは糸島半島沖断層群と前原断層と日向峠－小笠木峠断層は三本つながっていると可能性を指摘、耐震安全評価はＭ7.7と予測される。7月3日の九電交渉では「情報は把握しているが、同時に三連動するとは考えていない。評価を変更する必要はないと考えている」と言った。Ｍ7.0とＭ7.7は地震のエネルギーは10倍ともなるといわれているのなら、より安全側に立って見直すべきである。

（２）免震重要棟問題

免震重要棟設置予定は2015年度を目処としているが、東電福島原発事故でも、免震事務棟があったことが不幸中の幸いであった。この事故を踏まえ、緊急時対策所は仮設拠点に過ぎず90平方メートルしかないなどの課題が浮上しているのであるなら、2015年度まで再稼働すべきでない。

（３）防災問題

県内全２０自治体に２０１２年１０月ごろから安全協定・放射能拡散予想図・避難計画についての情報を面談して説明してきたが、住民の命と財産を守るに足りる充分な避難対策も立てらていない自治体が多くあったことは事実である。また、玄海原発の周辺には住民のいる多くの離島があること、災害弱者といわれる老人や介護の必要な人の対応などなど手つかずだ。原発事故は24時間のうち、どこにやってくるか誰にも解らない。まともな防災計画など立てられるはずがない。

（４）１号機の脆性遷移（ぜいせいせんい）温度98度の問題と１号機の可燃性ケーブル問題

脆性遷移98度をもって再稼働などありえない。

また、可燃性ケーブルについては、九電は「延焼防止剤を塗っており、新基準への適合性について具体的に検討している」 としているが、これまでも原発サイトでの火災はたくさんあった。火災対策なくして再稼働ありえない。

（５）３号機はプルサーマルであること

プルサーマルは、安全余裕を食いつぶすといわれている。これは、市民の安心できる生活を食いつぶすという事に比例する。核燃料サイクルの行き詰まりの後始末であること、ウラン燃料に比べて放射性核種の毒性の影響が大きいなど、「プルサーマルって何ですか」と住民へ充分知らされていない。

（６）使用済み燃料の問題

あと２．６回で満杯になるとされている。リラッキングという姑息な手段で乗り切ろうとしているが、住民側に納得の行く説明もなしに再稼働は認められない。

（７）非常用ディーゼル発電が地下にある。

（８）安定ヨウソ剤の配布について

福島の事故を教訓として佐賀県民はじめ、福岡、長崎とあらゆる想定を考慮して、最大の安全側にたった事前対処が不可欠である。

（９）九電の信頼は地に堕ちたまま

古川知事に端を発した「やらせメール問題」の反省もない中、松尾前会長の「1日動かせば10億円」発言など、信頼は地に堕ちたままである。